岩手県大船渡市における気仙大工による歴史的建造物の調査研究

ー 文化財保護の提案 ー

Keywords
気仙大工　保護　大船渡市
長安寺三門　小松家住宅

K09108　米田 一輝

1. はじめに

1.1 研究目的・背景

岩手県の大船渡市と陸前高田市を中心とする気仙地方（旧気仙郡）に「気仙大工」という大工集団が存在する。彼らは優れた技術を持ち、現在でも東北地方を中心に数多くの建築作品が残っている。中には高い評価を受けているものもある。

しかし2011年3月11日の震災では多くの気仙大工の作品が失われた。また地方の問題点である人口の過疎化や高齢化、それに伴う建築物の管理不足、技術力の低下、費用不足、様々な要因のために優れた作品が失われつつある。

現在気仙地方で文化財指定となっている気仙大工による建造物は少ない。陸前高田市は4つ、住田町は1つの気仙大工の建築作品が文化財となっている。しかし大船渡市は気仙大工による多くの民家建築や社寺建築が現存しているにもかかわらず、建造物の文化財がひとつもない。気仙大工の特異な技術、優れた建築物は、未来に伝えるべき文化であり、保護していくべきである。

本研究は、岩手県大船渡市において、気仙大工による建造物を保護することを目的とし、歴史的価値、文化的価値を見出す。

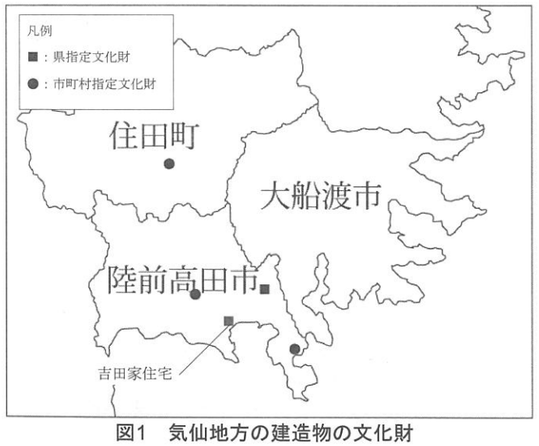


図1　気仙地方の建造物の文化財

1.2 研究手法

研究対象は気仙大工の代表的な建築作品である「長安寺三門」及び「小松家住宅」に絞って研究を進める。それぞれ異なる手法で研究を行う。

「長安寺三門」については、木割の基本である枝数が記入されている建設当時の絵図面が残っている。その絵図面から当時の設計手法を導き、価値を見出す。

「小松家住宅」については評価すべき要素の抽出及び気仙大工の特徴の列挙を行い価値を見出す。

1.3 調査

第一回：5月21日～23日　的場・清水川地区、今泉地区　集落調査
第二回：10月30日、31日　長安寺三門実測
第三回：11月13日、14日　小松家住宅実測

図2　調査対象地区及び建物

2. 気仙大工について

2.1 気仙大工概要

気仙大工は藩政時代末以前から一年の大半を居住地を離れて仕事に従事する出稼ぎ大工であり、留守を守る妻子と老人が農作業などに従事する生活が見られていた。出稼ぎ先で気仙大工と呼称されたことが名前の起源であり地元でも気仙大工の愛称で呼ばれた。気仙大工の出稼ぎの範囲は、北は北海道、南は関東地方や中国地方までにも拡大し、各地で腕を揮った。

気仙大工の特徴のひとつに、屋大工でありながら社寺建築も手掛けるということが挙げられる。社寺建築を建てる際、宮大工より気仙大工の方が安価に済むためである。また気仙大工は自分の力を誇示するために、社寺建築の彫刻や細かな化粧などを民家建築や公共建築にも取り入れ、技術を昇華させた。

2.2 気仙大工の技術の特徴

民家において、気仙大工は特異な技術を用いたり変わった仕上げをする。その起源は、仕事を得るために自分の技術をアピールしたというところにある。また、気仙地方には特有の構法があり、気仙大工の伝統の技巧とも言える。数ある技法の内、特徴的なものをいくつか記す。

(1) 扇垂木

気仙大工は社寺建築の技術も十分に取得しているため、民家にも本格的な扇垂木を採用している。

(2) 折り上げ天井

天井が周囲の壁面から直接水平に張られずに、円形に湾曲した支輪によって持ち上げられたもの。社寺建築に用いられる技法である。

(3) 鼠走り・鼠潜り

民家の長押の上に鼠走りと呼ばれる鼠の通路が設けらている。また、欄間の隅には鼠が通れる鼠潜りと呼ばれるスペースが設けられている。鼠走りと鼠潜りは、欄間などの細工を鼠の被害から守るために設けられたものである。これらは気仙地方特有のものであるが、気仙大工の遊び心ともとれる。

(4) 鼻鴨居（はなかもい）・船枻（せがい）造り

船枻造りは民家において側柱上部から鼻鴨居と呼ばれる腕木を突出してその上に小板を張った棚を指す。気仙地方の構法的特徴のひとつをなすものであり、意匠上の理由と軒下空間の利用を目的としたものである。鼻鴨居は単なる角材ではなく曲線を用いたデザインとなっており装飾的な技法である。

写真1　鼠走り・鼠潜り

写真2　船枻造り

3. 現状

3.1 陸前高田市矢作町的場・清水川地区

陸前高田市矢作町の的場・清水川地区は、気仙大工の手によってつくられた民家が多く残る集落である。この集落は昭和58年(1983年)に日本建築学会による古民家調査が行われた。現在の民家の残存状況を調査したところ、いくつかの民家を除いて、約30年前より大きな変化は見られなかった。

しかしこの地域では高齢化が著しく進んでいて、高齢者の一人暮らしや、空家等が見られた。それによる田畑の耕作放棄や民家などの補修が行き届かないこと等も問題点と言える。

写真3　陸前高田市矢作町的場・清水川地区

表1　民家残存状況（変化があった民家を抜粋）

No.	氏名	年代	残存状況	残存状況詳細
4	佐藤好次郎	大正 11 年	無	火事で焼失
6	佐藤岩夫	大正 13 年	有	屋根:カヤ→瓦
7	佐藤邦雄	明治初	有	屋根:カヤ→トタン
8	佐藤清一	明治 22 年	有	屋根:カヤ→トタン
12	佐藤定吉	昭和 37 年	有	建て替え
20	佐藤シズヲ		有	現在使われていない
22	佐藤岩之助	約 100 年前	有	屋根:カヤ→トタン
27	佐藤慶蔵		有	屋根:カヤ→鉄板

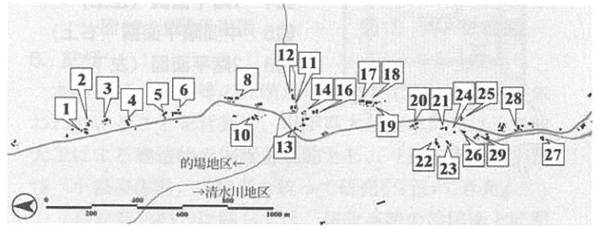


図3　的場・清水川地区調査地

3.2 陸前高田市今泉地区

陸前高田市の今泉地区も昭和58年(1983年)の日本建築学会の古民家調査が行われた地区で、気仙大工による民家等が多く残る地区であった。しかし2011年3月11日の震災で、津波の被害に遭い、現在は何も残っていない。

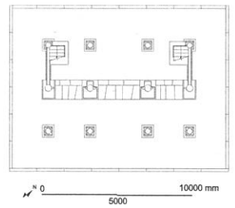
今泉地区には県指定有形文化財である「吉田家住宅」があったが例に漏れず津波の被害に遭った。現在、「吉田家住宅」の部材は改修され、保存されているが再建の目途は立っていない。

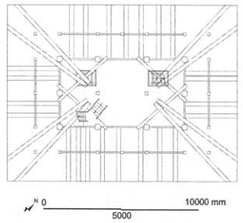
写真4　陸前高田市今泉地区

写真5　吉田家住宅部材

4. 長安寺三門

写真6　長安寺三門





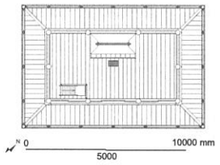


図4　1階平面図（左上）
図5　中間階平面図（右上）
図6　2階平面図（左下）

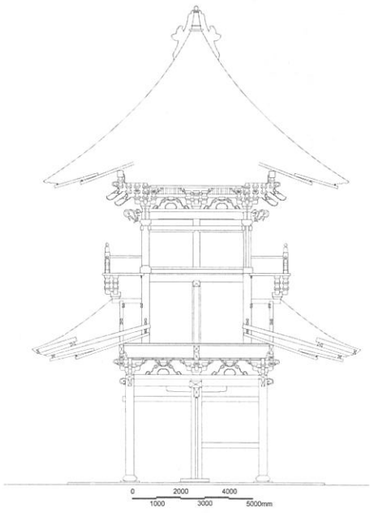


図7　長安寺三門　短手方向断面図

4.1　概要

長安寺三門は岩手県大船渡市日頃市町に位置し、気仙大工松山五郎吉によって建設された。

長安寺は、京都東本願寺の末寺で真宗大谷派に属する。開創は平安時代末期と考えられている。当初は天台宗を継承したが明徳2年（1391年）に現在の真宗に改宗した。三門は、寛政10年（1798年）竣工とされているが、藩主伊達公との軋轢が生じたため、工事中止の命を受けた未完成の建造物である。

4.2　気仙大工松山五郎吉について

気仙大工松山五郎吉は、長安寺三門の他に、生涯で6つの社寺建築建造に携わっている。また、彫り物師として社寺建築建造に参加していたり、須弥壇造作もしていた。大工としての技術だけでなく、様々な技術を持ち合わせていたと考えられる。

表2　気仙大工松山五郎吉略歴

年代(年)	年齢	出来事
寛延 3(1754)	0	誕生
寛政 5(1793)	40	八幡神社(陸前高田市米崎町)
寛政 8(1796)	43	浄土寺本堂(陸前高田市)彫り物師
寛政 8(1796)	43	松島神社(大船渡市末崎町)
寛政 10(1798)	45	長安寺三門(大船渡市日頃市町)
寛政 12(1800)	47	浄福寺本堂(住田町世田米)
文化 3(1806)	53	正徳寺本堂(陸前高田市小友町)
文化 4(1807)	54	浄福寺　須弥壇造作(住田町世田米)
天保 13(1843)	89	死去

4.3　絵図面

長安寺三門の建設当時の絵図面には、枝割や各部の寸法等が描かれていた。絵図面をデータ化して記載されている内容を明確にした。

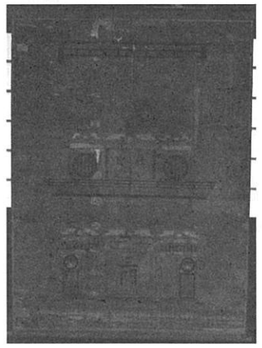


写真7　絵図面

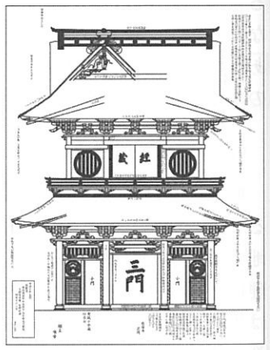


図8　写真7をデータ化したもの

4.4　匠明との比較

匠明の門記集より「三間中門之図」「三間楼門之図」「三間山門之図」を抜粋し、三間三門である長安寺三門との比較を行った。

平面においては、他の3つの門と枝割を比較するとやや小さめで三間中門と三間楼門の中間の規模の門であると言える。

立面において、他の門との一番の違いは屋根勾配である。他の門の二層目の屋根勾配が七寸五分勾配であるのに対し長安寺三門は九寸勾配であるため勾配が大きく異なる。

全体的に見れば木割がやや細めで高く伸びあがった印象の門となっているが、木割に基づいたオーソドックスな三門であると言える。

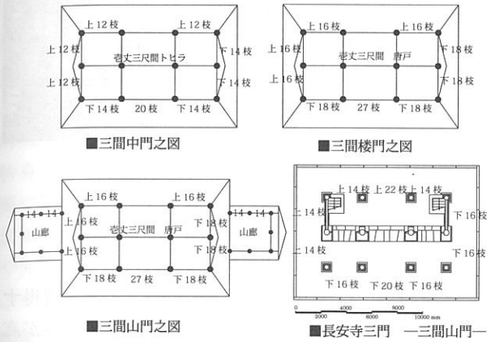


図9　匠明との比較（平面）

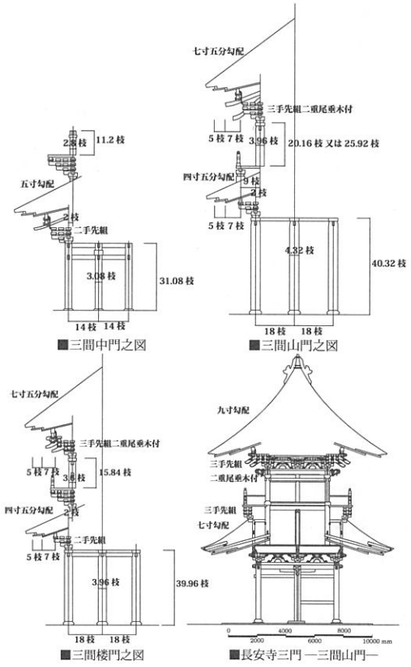


図10　匠明との比較（立面）

5. 小松家住宅

写真8　小松家住宅

小松家住宅は岩手県大船渡市三陸町にある民家である。明治27年に建てられたが、過去2度の改修が行われ現在も使われている。船枻造りや鼠走り・鼠潜り、戸袋や欄間の細工など、気仙大工の技術が集約された住宅であると言える。

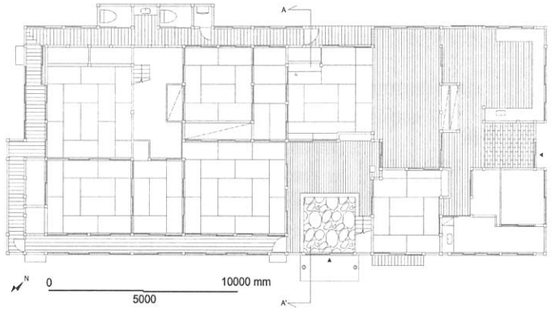


図11　1階平面図

図12　2階平面図

図13　A-A'断面図

6. 総括

本研究は、震災等の問題から気仙大工の建築作品が失われていることを背景に、岩手県大船渡市における気仙大工による建造物の保護を目的とし、「長安寺三門」及び「小松家住宅」に焦点を絞って研究を行ってきた。

「長安寺三門」に関しては、建設当時の絵図面と匠明より抜粋した3つの門とを比較した結果どの門とも合致はしなかった。しかし1608年の匠明と1798年に建てられた長安寺三門とでは木割に違いが生じていると考えられる。以上のことから松山五郎吉は木割をよく理解した上で長安寺三門を設計したと言える。これは五郎吉が多くの社寺建築に関わっていたことからも言える。

「小松家住宅」に関しては、気仙大工の特異な技術が集約された住宅であり、現在でも非常にいい状態で使われている住宅であることから十分価値があると言える。

以上より「長安寺三門」及び「小松家住宅」は保護すべき対象であると言える。

参考文献

1) 「気仙大工」平山憲治　さんりく文庫　1976年
2) 「気仙大工雑纂」平山憲治　耕風社　1992年
3) 「陸前高田地方の民家普請における気仙大工とその技法について」高橋恒夫　日本建築学会論文報告集第349号　1985年
4) 「気仙大工の技術習得及び造作技法の近年の変化に関する調査研究」相野谷和之　職業訓練大学校卒業論文　1993年
5)「匠明」　伊藤要太郎　鹿島出版会　1971年